

中学歴史教科書 読み比べ

平成31年
4月1日(月)
第5号

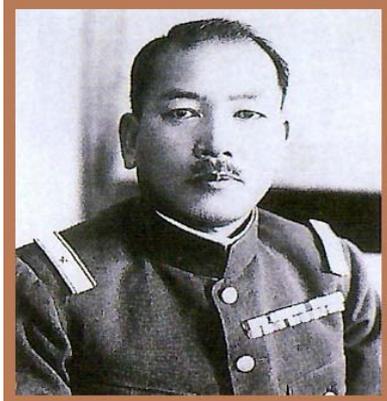
〈発行者〉
千葉県
中学歴史教科書
読み比べ会

〈連絡先電話〉
070-6941-1941

杉原千畝

東洋のシンドラーは、一人ではなかった！

千葉県中学歴史教科書読み比べ会 オフィシャルサイト: <https://kyokasyoyokunare.jimdo.com/>



(上)杉原千畝(1900~86)
(下)樋口季一郎(1888~1970)
(自由社版中学歴史教科書より)

【はじめに】

一九九三年のアメリカ映画『シンドラーのリスト』(ステイブリン・スピルバーグ監督)が発表されて以降、東洋のシンドラーとして、杉原千畝(すぎはらちうね)の名が、広く世界に知られるようになった。そのオスカー・シンドラーは、ドイツ人でありながら、第二次世界大戦時に、ナチス・ドイツによるユダヤ人への迫害が進む中、自身が経営する軍需工場で働く一〇〇人以上ものポーランド系ユダヤ人を、工場に必要な生産力だという名目で強制収容所送りを阻止し、その命を救った人物として知られている。一方の杉原千畝は、第二次世界大戦当時、リトアニアの領事館に赴任していた際、ナチス・ドイツの迫害によりポーランドを含むヨーロッパ各地から逃れてきた難民たちに同情し、一九四〇年七月から八月にかけて、大量のビザを発給し、避難民の命を救った人物である。その避難民の多くが、ユダヤ人であったことから、後に東洋のシンドラーと呼ばれるようになったのである。

杉原の人道的行動によってビザの発給を受けた難民たちは、その後シベリア鉄道で満州を通り、日本を経由して脱出に成功したが、その道中ほどのような状況だったのだろうか？そして、そこに関わった人々について、各社の歴史教科書ではどのように記述されているのか読み比べてみた。

以下、東京書籍、教育出版、帝国書院、自由社の順に引用する。

【東京書籍】

「命のビザ」コラム二二三頁

第二次世界大戦のさなかの一九四〇年七月、ポーランドのユダヤ人が、ナチス・ドイツの迫害からのがれるため、ソ連と日本を通過してアメリカなどにわたろうと、リトアニアの日本領事館に押し寄せました。領事代理の杉原千畝は、ドイツと同盟関係にあった日本政府の意向を無視して、一か月余りにわたり、寸暇をおしんでビザ(査証)を書き続け、約六〇〇〇人の命を救いました。杉原の人道的な行為は、同様に多数のユダヤ人を救ったドイツ人実業家のオスカー・シンドラー(一九〇三〜七四)と並んで、国際的に高く評価されています。

【教育出版】

「後藤新平と杉原千畝」コラム二三一頁

一九四〇年七月、リトアニアの都市カウナスの日本領事館前に、何百人もの人々が集まっていました。ドイツに占領されたポーランドから、命からがら逃げてきたユダヤ人たちがいました。この人たちに残された方法は、シベリア鉄道でソ連を横切り、日本に渡ってアメリカなどへ逃げることでした。そのため、日本を通過してもよいことを証明するビザ(査証)が必要でした。

そこで杉原千畝は、日本の外務省に、日本を通過するためビザを発行してよいか問い合わせました。外務省から電報が入ると、杉原は食い入るように見つめました。：「ユダヤ人たちは、日本からどこに行こうとしているのか。その国の入国許可証がないかぎり、ビザを発行してはならない。」杉原は、また電報を打ちました。「今は、入国許可証はありませんが、日本に着くころまでには取れるでしょう。」しかし、外務省の返事は同じでした。：

◎杉原の決断

杉原は外交官なので、外務省の指示には従わなければなりません。杉原は、もし自分がビザを発行しなければ、ここに集まっている大勢のユダヤ人たちがどうなるか知っていました。そして、悩み抜いた末に、ビザを発行することを決断

しました。それから約一か月の間、杉原は、夜も徹してビザを書き続けました。そのおかげで、ユダヤ人たちは、シベリアを経由して、敦賀（福井県）から日本に入国し、神戸や横浜からアメリカなどへ渡りました。こうして約六〇〇〇人もユダヤ人の命が救われることになったのです。第二次世界大戦が終わって帰国した杉原は、外務省を辞めるように勧められました。理由は、カウナスで外務省の指示に従わなかったからでした。≪

【帝国書院】

「ドイツのユダヤ人迫害に抵抗した日本人」コラム二二五頁
≪一九三〇年代以降、ユダヤ人を迫害するドイツに対して、抵抗した日本人もいました。

リトアニアの日本領事代理であった杉原千畝は、ドイツと同盟関係にある日本政府の意向に反して、ユダヤ人に対してビザを発給して出国できるようにしました。約六〇〇〇人のユダヤ人が、敦賀（福井県）から日本に入国して神戸や横浜からアメリカにわたり、命を救われました。

また、当時ハル濱（ハルビン）の陸軍の軍人であった樋口季一郎は、シベリア鉄道を経由し、「満州」を通じて国外へのがれようとしたユダヤ人のために、列車を手配しました。これは「満州国」の許可を得ずに行われたことでしたが、樋口の決断によって多くのユダヤ人の命が救われました。≪

【自由社】

「迫害されたユダヤ人を助けた日本人」コラム二三七頁
≪一九三〇年三月、ソ連と満州の国境にあるシベリア鉄道のオトポール駅に、ナチス・ドイツに迫害され、ビザをもたずにのがれてきたユダヤ人難民の一団が到着した。

当時、日本はドイツと友好関係にあったが、知らせを受けたハルピン特務機関長の樋口季一郎少将は、満州国建国の「五族協和」の理念からこれを人道問題としてあつかい、満鉄に依頼して救援列車を次々と出し、上海などに逃げる手助けをした。

まもなく事情を知ったドイツは、外務省を通じて抗議してきたが、関東軍参謀長の東条英機は「日本はドイツの属国ではない」として、部下である樋口の処置を認め、ドイツからの抗議もうやむやにして、一万一〇〇〇人のユダヤ人の命が救われた。

第二次世界大戦が始まったのちの一九四〇年七月、バルト海沿岸のリトアニアにある日本領事館に、ドイツ軍に追われたユダヤ人が、シベリアと日本を経由して安全な国にのがれようと集まってきた。

当時、日本の外交はドイツとの友好関係を大切にしていたが、外交官の杉原千畝は、日本入国のビザを発給することを決断し、手がはれあがるまで徹夜で書きつづけて、六〇〇〇人のユダヤ人を合法的に出国させ、彼らの命を救った。
戦争後、樋口と杉原の勇気ある行動は、イスラエル政府によって表彰された。

東京書籍は、杉原千畝の功績について簡単に触れている。教育出版は、物語風に長文にわたって杉原の行動を記述しているが、杉原が外務省を退官した際の記述には諸説が有り疑問が残る。両社に共通するのは、樋口季一郎、東条英機が全く登場していない点である。帝国書院は、樋口季一郎が登場している点が評価できる。自由社は、樋口季一郎が人道問題として満鉄に依頼し、難民を輸送したこと、また東条英機がドイツの抗議にも拘わらず、樋口の処置を認めたことなどを記述している。杉原だけでなく、樋口や東条も、それぞれの人道的配慮に基づく行動によって、難民が無事脱出できたことが理解できる記述となっている。

よく考えてみれば、たった一人の外交官の力だけでは、このような国家間にまたがる大規模な難民の移動は困難である。この出来事は、当時の日本が国家の判断として、ドイツとの外交よりも、人道問題を優先させた一つの事例として記述されるべきではないだろうか。以上



東条英機(1884~1948)

「中学歴史教科書読み比べについて」

千葉県内の中学歴史教科書の採択状況は、左記のとおりです。
教育出版（船橋、習志野、八千代、香取、神崎、多古、東庄）

帝国書院（市川、浦安）
東京書籍（右を除く市町村）

私共は、この大手三社に加え、自由社の併せて四社の歴史教科書を約二年間に亘って読み比べました。その結果、正しい歴史の記述がなされ、子供が日本の国に誇りの持てる歴史教科書は、自由社の教科書であるとの結論に至りました。そして、この結果を踏まえ、県内の中学生の子供を持つ父兄、並びに教育関係者への周知を図るため、この「中学歴史教科書読み比べ」を不定期に発行し、現在千葉県内で採択されている大手三社の歴史教科書の問題点を明らかにしてゆく所存です。（会員一同）

※バックナンバーご希望の方は、オフィシャルサイトへどうぞ。